

学校教育目標との関連

教育目標			
知	かしこく	意欲的に学ぶ子	よく考え表現する子
徳	あたたかく	仲間と共に成長する子	全ての命を大切にする子
体	つよく	健康でたくましい子	目標をもってやりぬく子 重点目標

児童の実態

(1) 児童アンケートより

「自分の意見や考えを發表することは大切であると思う」と回答している児童は90%以上いる。しかし、「自分の意見や考えを發表することができる」と回答している児童は75%に満たない。「文章を書くことが好きではない」と回答している児童が25%以上いることから、主体的に自分の意見や考えを表現できる児童の育成を図ることが本校の課題である。

(2) 体力テストより

体力テストの結果としては、総合的に見て、どの学年もおおよそ全国の平均程度の数値であり、東京都の平均とほぼ等しいか、平均より高い傾向がある。ソフトボール投げは、平均を下回る結果が多かった。上体起こしも平均を下回る場所が多かった。近年、体を動かす機会・場所・時間が減り、主体的に運動に取り組む姿勢を高めていくことが課題である。

1 すべての授業において年間を通して取り組む授業改善の視点

～これまでの校内研究の取り組みを生かして～

(1) 問題解決的な学習 (H26年度校内研究)

児童全員が、一単位時間の授業を通して学習に対する充実感や達成感を味わうことのできる授業を目指す。そのために、児童の実態に適応する明確な課題と活動内容を設定していく。

〈具体的な実践例〉

- ・学習問題を児童自身に考えさせたり、めあてに対して必然性のある活動を取り入れたりすることで、児童主体の授業作りを実践する。
- ・単元の学習計画表や自分のノートを活用させる習慣を定着させることで、見通しをもって自ら学習に取り組んだり、既習事項を活用しながら解決したりできるようにする。
- ・学習問題を追究する段階では、ペアや小グループでの活動を取り入れることで、自分と友達の考えの相違点に気付いたり、自分の考えを深めたりすることができるようにする。
- ・一単位時間の終末には、めあてに対する振り返りの時間を確保し、自分が学習したことやできるようになったことを実感させることで、充実感や達成感を味わえるようにする。

(2) インクルーシブ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習 (H27・28年度校内研究)

全ての子供にとって「分かる・できる」「楽しい」授業を目指す。そのために、児童理解を徹底し、全体指導の中で一人一人に応じた支援をしていくことを常に意識して授業を実践していく。

〈インクルーシブの視点〉

学習意欲の向上の工夫 (学習上の困難を克服するための配慮) 自信を持たせる工夫 (心理面の配慮)

〈本校のユニバーサルデザインの定義〉

- ・焦点化…授業のねらいに合っためあてと活動を設定し、児童に思考させる視点を明確にすることで、ねらいを達成できるようにする。
- ・視覚化…資料や具体物を活用したり言葉を見える化したりすることで、確かな理解のもとで思考させられるようにする。
- ・共有化…児童同士の関わり合いを通して共通点や相違点に気付かせ、自分の考えを深められるようにする。

〈ユニバーサルデザインの手立て〉

- ・環境の工夫…落ち着いた教室環境、見やすい掲示物など
- ・活動の工夫…効果的なペア、グループ学習など
- ・教材の工夫…ヒントカード、視覚教材の効果的活用など
- ・評価の工夫…児童に対する明確な到達目標の提示、評価方法の明確化など
- ・情報伝達の工夫…構造的な板書、ハンドサインなど

2 校内研究を主軸とした授業改善推進プラン

研究主題

「健康でたくましく、目標に向かってやりぬく子の育成」
～働かせる体育的な見方・考え方を明らかにした授業づくり～

主題設定の理由

本校では、生きる力として学習指導要領に示された「未来を切り拓くために必要な資質・能力」を教育目標(つよく・かしこく・あたたかく)の育てたい子供の姿とし、全ての教育活動において子供の主体性を生かした学校づくりを進めている。

本年度は、昨年度までの研究成果を踏まえ、教育目標「つよく」(健康でたくましい子・目標をもってやりぬく子)を重点目標とするとともに、教育目標「つよく」の目指す子供の姿を研究主題とし、その具現化を図る。

学習指導要領に基づき、体育的な見方・考え方を働かせながら、自分の特性や友達の良さを活かして目標に向かってやりぬく子の育成を目指していく。

今年度は、若手の先生方(1年次～4年次)も増え、更に指導力を高めていく必要がある。自己の課題を明確にして、研究主題を意識しながら自主的に教材研究を行っていく校内研究にしていく。

研究仮説

- (1) 目標やめあての振り返りの活動を工夫することで、目指す児童像に近づけよう。
- (2) 課題解決に向けた学習過程を設定することで、目標を明確にして学習を進めることができるであろう。

目指す児童像

低学年	中学年	高学年
自分にあった目標を持ち、できなかつたときにもう一度チャレンジすることができる児童	目標に向けて、協力したり工夫したりして取り組む児童	・よりよい目標をもってやりぬく児童 ・振り返りを次の時間に生かし、自己肯定感を高めることができる児童

研究内容

〈体育的な見方・考え方を働かせた指導の在り方〉

学習指導要領をもとに、体育的な見方・考え方を扱う場面である「する、みる、支える、知る」の4つの活動に着目し、体育的な見方考え方を働かせる指導に生かしていく。

【体育の見方・考え方】

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びと共に体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・見る・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること。

その際、児童一人一人が自分の特性を理解し、どう生かすかを考えて学習に向き合うことが、体育的な見方・考え方を働かせる児童の育成に繋がる。

特に、学習の成果を振り返る「支える活動」では、目標に向かって児童がチーム間で作戦会議を行ったり、学習カードに自己の考えを記したりすることから、目標に向かってやりぬく子の育成を目指す上で大切な活動であると捉えた。

知る活動(つかむ)	運動の価値や特性を理解し、今の自分の動きを分析できるようにする。
する活動(つくる)	課題の解決に向けて練習方法を考え、実践できるようにする。
見る活動(深める)	練習の成果を確認したり把握したりし、自己やチームの技能を高めることができるようにする。
支える活動(まとめる)	仲間と共に運動したり、協力したりする楽しさや喜びを味わうことができるようにする。